



ジャック・ヒギンズ

サンダー・ポイントの雷鳴

黒原敏行・訳

THUNDER POINT

早川書房

サンダー・ポイントの雷鳴

ジャック・ヒギンズ
黒原敏行訳



Hayakawa Novels

財団支援

THUNDER POINT

by Jack Higgins

Copyright © 1993

by Jack Higgins

First published 1995 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by arrangement with

Septembertide Publishing BV.

% Ed Victor Ltd.

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

サンダー・ポイントの^{らいめい}雷鳴

1995年2月10日 初版印刷

1995年2月15日 初版発行

著者 ジャック・ヒギンズ

訳者 黒原^{くろはら}敏^{とし}行^{ゆき}

発行者 早川 浩

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 03-3252-3111(大代表)

振替 00160-3-47799

印刷所 株式会社享有堂印刷所

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-15-207900-2 C0097

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取りかえいたします。

サンダー・ポイントの雷鳴

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1995 Hayakawa Publishing, Inc.

娘の
ハンナに

登場人物

ショーン・ディロン	元IRAテロリスト
チャールズ・ファーガスン	グループ・フォアの長
フランシス・ペイマー	内務担当閣外相
サイモン・カーター	国防情報局副長官
ジャック・レイン	特別保安部警部
ガス・トラヴァース	元英国海軍少将
ヘンリー・ベイカー	セント・ジョン島のダイバー
ジェニー・グラント	ベイカーと暮らしている娘
ボブ・カーニー	ダイビング・ショップの経営者
ビリー・ジョーンズ	〈ジェニーの店〉のバーテンダー
メアリー・ジョーンズ	ビリーの妻
ジョゼフ・ジャクソン	サムソン島のタクシー運転手
カルロス・プリエト	サムソン島のホテルの総支配人
マックス・サンチャゴ	実業家
アルガロ	}サンチャゴの手下
フリアン・セラ	

ナチ党官房長、總統秘書長を兼任した、ライヒスライタール国家指導官マルティン・ボルマンは、ヒトラー亡きあとのドイツにおいて最高実力者となった。そのボルマンが、本当に一九四五年五月二日の未明、ベルリンの總統官邸の地下壕から脱出したのち、ヴァイデンダマー橋を渡ろうとして死んだのかどうかは、これまでもさかんに論議されてきた問題である。ヨシフ・スターリンは彼が生きていると信じていた。ボルマンの運転手だったヤークプ・グラスは戦後のミュンヘンでもとの上司を見かけたと言い、一九六〇年にはアイヒマンがイスラエル当局にボルマンは生きていると証言した。高名なナチ・ハンター、ジーマン・ヴィーゼンタールもつねづね生存説を唱えており、ナチ親衛隊に所属していたあるスペイン人は、ボルマンが敗戦の直前にUボートでノルウェーを発ち、南米に向かったと語っている……。

プロローグ

ベルリン―総統官邸の地下壕

一九四五年四月三十日

都市^{まち}全体に火がついて、さながら地上に地獄が現れたかのようだった。地面は砲弾の衝撃に揺らぎ、夜が明けると、棺にかける黒い布のような煙が街の上を漂うさまが人々の目に映った。すでにソ連軍によって制圧されたベルリンの東半分では、持てるだけの荷物を持った難民が、アメリカ軍の侵攻してくる西のほうへ逃れようと、総統官邸に近いヴィルヘルム通りを歩いていった。

誰もがベルリンの命運が尽きたことを知り、恐ろしいパニックに陥っていた。総統官邸の近くでは、一団の親衛隊員が軍服を着た人間をかたっぱしから引き止めていた。行き先を問われてしかるべき返答のできない者は、

敵前逃亡を企てたとして、即座に手近な街灯柱や樹木に吊された。ソ連軍が無差別に放つ砲弾の一つがかん高い音をたてて飛来した。人々は叫び声を上げながら四方に散った。

総統官邸は空襲でかなりの打撃を受け、とりわけ建物後部の損壊が著しかった。だが、厚さ三十メートルのコンクリートに守られた地中深くでは、総統とそのスタッフたちがまだ活動を続けていた。この地下壕はそれ自体で完全に自立した帝国であり、ラジオや無線電話により依然として外界との接触を保っていた。

官邸の裏庭も砲弾を浴びてひどい損傷を受け、かつての美しい庭園は、樹木が倒れ、地面のところどころに穴のあいた荒れ地と化していた。ただ一つ天の恵みと言えるのは、空襲がやんでいることだった。低くたれこめた雲と激しい雨が、今のところ空から航空機を締め出していたからだ。

荒廃した庭園を一人で歩いているその男は、周囲で起こっていることに奇妙なくらい無頓着な様子で、官邸の向こう側に砲弾が落ちてみびくりとも身をすくませなかった。雨はますます激しくなってきたが、男はコートの襟を立てただけだった。煙草に火をつけ、それを手のひ

らで包むようにしてつまみ、また歩き始めた。

さして背の高くない、肩のがっしりした、粗野な顔だちの男だった。工場労働者や沖仲仕の間に混じれば完全に溶け込んでしまいそうな、人の記憶に残る顕著な特徴のまったくない男だった。裾が足首まで届く着古したコートからくたびれたまびさし付きの帽子まで、どこをとっても平凡の一語につきた。

どうということのないただの男、と人は見ただろうが、彼こそはナチ党官房長と総統秘書長を兼任する国家指導官、マルティン・ボルマンその人であった。ボルマンは、大戦末期のドイツにおいて、ヒトラーにつぐ実力者となっていた。だが、彼の名を聞いたことのあるドイツ国民は少なかつたし、顔を知っている者はさらに少なかつた。これは彼が意識的にそのような身の処し方をしてきたせいである。表舞台に出ることなく、裏から権力を行使する、というのが彼のやり方だった。

だが、それももう過去の話だった。すべては終わり、最終的な場面が訪れたのだ。ソ連軍はまもなくこの官邸を占拠するだろう。ボルマンはヒトラーにバヴァリアへ逃れるよう説得を試みたが、総統は断固として逃亡を拒否し、かねて公言していたとおり、自殺をすると行って

譲らなかつた。

一人の親衛隊の伍長が地下壕の出入り口から現れ、急ぎ足でボルマンに近づいていった。伍長はナチ式の敬礼をした。「国家指導官どの、総統が呼びびです」

「今、どこにおられる？」

「書斎です」

「よし、すぐに行く」二人が地下壕の出入り口へ向かっていく途中、またしても官邸の反対側に数個の砲弾が落下して、建物の破片を空中に吹き上げた。ボルマンが言った。「戦車隊か？」

「そのようです、国家指導官どの。もう、半マイル以内に近づいています」

この親衛隊の伍長は、まだ年は若い、実戦経験の豊富な剛胆な男だった。ボルマンは伍長の肩をたたいた。「しかし、よくいうだろう？ 待てば海路の日和あり、と」

ボルマンが笑いだし、若い伍長もそれに唱和した。二人はコンクリートの階段を降りていった。

ボルマンが書斎のドアをノックしたとき、ヒトラーは机につき、拡大鏡を使って地図を調べていた。総統が顔

を上げた。

「ああ、ボルマン、きたな。入りました。もうあまり時間がない」

「そのようですね、総統閣下」ボルマンは総統の言わんとするところを測りかねて、いささか心もとない口ぶりで答えた。

「やつらはじきにやってくるぞ、ボルマン、いまはいロシア人どもが。だが、わたしは待っていてやるつもりはない。スターリンは、何としてもわたしを檻に入れて、見せ物にしたがるだろうからな」

「そんなことは絶対にさせません、総統閣下」

「もちろんだ。わたしは自殺する。妻も、その暗い旅に同行してくれることになっている」

妻というのは元愛人のエヴァ・ブラウンのことで、ヒトラーは二十九日の深夜、彼女と正式に結婚していた。

「わたしとしては、閣下がまだバヴァリアへの決死行について、最終決断を保留しておられると期待していたのですが」ボルマンがこう言ったのは、本心からというよりも、ほかに何も言うことがないからだだった。

「いや、わたしの心はもう決まっている。だが、きみにはやるべき仕事がある」

ヒトラーは立ち上がり、足を引きずるようにして、机の後ろからゆっくりと出てきた。わずか三年前にはウラル山脈からイギリス海峡までを支配していた男が、今は頬もこけ、上着がだぶついて見えた。ボルマンの手を握ったヒトラーの手は中風で軽く震えていた。だが、その手にはまだ力がこもっていて、それがボルマンの心を動かした。

「どんな仕事でもやります、総統閣下」

「きみが頼りになる男であることは知っている。やってもらいたいのは、〈同志のための活動〉の統括だ」ヒトラーは弱々しい足どりで机に戻った。「それがきみの仕事だ、ボルマン。国家社会主義を生き延びさせるのだ。」

われわれはスイスやその他の国の銀行に秘密口座を持ち、何億マルクにものぼる金塊を保有している。むろん、きみも詳しく知っていることだが」

「ええ、そのとおりです、総統閣下」

ヒトラーは机の下に手を入れ、鈍い銀色をした、かなり風変わりな外観のブリーフケースを取り出した。ボルマンは、右上の隅の海軍の紋章に目をとめた。

ヒトラーはブリーフケースを開いた。「この中にスイスの秘密口座の鍵と、今後のきみにとって役に立つはず

の品物がいくつか入っている」彼はうす茶色の封筒を一通取り出して掲げた。「南米やアメリカ合衆国にある同じような秘密口座について詳細を記したのもこの中だ。これらの国々には多くの友人たちがいて、きみからの連絡を待っている」

「ほかには何が、総統閣下？」

ヒトラーは大判のファイルを取り上げた。「わたしはこれを〈紳士録〉と呼んでいる。イギリスの支配階層に属する人物の名を数多く記したものだ。われわれの大義に共感を寄せている貴族や国会議員たちだ。アメリカの友人の名前も含まれている。そして、最後になったが、重要度においていささかも劣らないのが、これだ」ヒトラーは別の封筒を差し出した。「開けてみたまえ」

封筒の中には、羊皮紙そっくりの紙が一枚入っていた。一九四〇年七月にポルトガルのエストリールで書かれた手紙で、名宛人はヒトラー。紙の下のほうにある署名は、ウィンザー公のものであった。英語でしたためられた手紙の内容は単純そのものであった。ドイツが英本土侵攻に成功した暁には、ふたたびイギリス国王の地位につくことに同意する、というのである。

「ヘウィンザー密約書」だ」ヒトラーはさざりと言った。

「まさか。本物ですか？」ボルマンは驚愕して、尋ねた。「ヒムラーが本物だと保証した。やつがポルトガルにいる部下に命じて、ウィンザー公に接近させたのだ」

あるいは、そうヒムラーが言ったわけだ、とボルマンは思った。あのずる賢い小ネズミは、どんな大風呂敷でも広げる男だった。ボルマンは手紙を封筒に戻し、ヒトラーに返した。ヒトラーはそれをほかのものと一緒にブリーフケースに収めた。「このブリーフケースはUボートの艦長に支給されているものだ。蓋を閉めれば完全に密封され、耐火性、耐水性にすぐれている」ケースを押してよこした。「たった今から、きみのものだ」ヒトラーは中空に目を据え、しばし物思いにふける風情だった。「あのヒムラーの豚めが、連合軍と勝手に休戦条約を結ぼうとした。ムッソリーニとその愛人は北イタリアでパルチザンに殺され、足首に縄をかけられて逆さ吊りになったという」

「世界が狂い始めたのです」それからボルマンはしばらく間をおいて、こう言った。「一つだけお訊きたいことがあります、総統閣下。わたしはどうやって脱出すればいいのです？ われわれはすでに包囲されています」

ヒトラーは物思いから覚めた。「単純なことだ。東西

大通りを滑走路にして飛びたつのだ。知ってのとおり、リッター・フォン・グライム空軍元帥とハンナ・ライチュが昨日の真夜中にアラド機で脱出した。レーヒリンの空軍基地司令官には、わたしからじかに話を通してある」ヒトラーは机上の書類にチラッと目をやった。「ノイマンという若い大尉が、フィーゼラー・シュトルヒでの夜間飛行の任務に志願した。彼はすでに無事ベルリン入りして、きみの命令を待っている」

「その男は今、どこに？」

「ブランドンブルク門に近いゲッベルスの自宅の、例の巨大なガレージにいる。きみたちはそこからレーヒリンに飛び、長距離飛行に備えて燃料を補給したあと、ノルウェーのベルゲンへ行く」

「ベルゲン、ですか？」

「そこできみは潜水艦に乗り、南米に向かう。正確には、ベネズエラだ。向こうにはきみを出迎えてくれる人々がいる。とにかく、詳細はこの中に書いてある」ヒトラーは一通の封筒をよこした。「ここには、きみに全権を与える旨のわたしの署名入りの指令書と、何通かの偽造パスポートが入っている」

「では、今夜、飛ぶのですね？」

「いや、今から一時間以内にだ」ヒトラーは穏やかに言った。「激しい雨と分厚い雲のおかげで、目下のところ空には敵機がない。ノイマン大尉には驚くべき離れ業を演じる自信があるようだが、わたしもきっと彼がやりとげるだろうと思う。きみたちがうまくやってくれることを信じている」

もはや議論の余地はなく、ボルマンはうなずいた。

「もちろんです、総統閣下」

「さて、残る仕事は一つだけだ」ヒトラーは言った。

「寝室に、男が一人いる。ここへつれてきてくれたまえ」

寝室にいたのは、親衛隊の中将の制服を着た男だった。どこか見覚えのある男で、なぜかボルマンはひどく居心地の悪い思いを味わった。

「総統閣下」男はヒトラーにナチ式の敬礼をした。

「似ているのに気づいたかね、ボルマン？」ヒトラーが尋ねた。

言われてボルマンは、自分が妙な気分になった理由に思い至った。なるほど、この中将は自分に似ている。完璧にそっくりではないが、たしかに似ている。

「シュトラッサー中将はきみのかわりにここに残る」ヒ

トラーは言った。「いよいよ全員が脱出をはかる時、彼もほかの者たちと行動をとにもするが、それまでは人目を避けて待機することになる。暗闇の中で大混乱が起きるから、誰も替え玉であることには気づくまい。みな、わが身を救うので精一杯だろうからな」ヒトラーはシュトラッサー中将のほうを向いた。「わたしのために、やってくれるな？」

「喜んで」シュトラッサーは答えた。

「よろしい。では、さっそく制服を交換したまえ。わたしの寝室を使うといい」ヒトラーは机の向こうから出てきて、ボルマンの両手を握った。「この場でお別れをいうぞ。きみとは、もう会うことはない」

生まれつきの皮肉屋であるにもかかわらず、ボルマンはいたく感動した。「きつとうまくやってみせます、総統閣下」

「きみなら大丈夫だと信じているよ」

ヒトラーは力のない足どりで書斎を出ていった。総統の背後でドアが閉まると、ボルマンはシュトラッサーを顧みた。「よし、では、着替えだ」

そのちょうど三十分後、ボルマンはヘルマン・ゲーリ

ング通りの地下壕の出入り口から地上に出た。親衛隊の制服の上に重い革の軍用コートを着て、例のブリーフェースと、民間人の服装を収めた大型の軍用鞆を手にしていた。ポケットには消音器をつけたモーゼル拳銃をしのばせ、胸の前にはシュマイザーの短機関銃を吊していた。ボルマンはティアーガルテンの東のはずれの外周にそって歩いた。街には人があふれていたが、その大半が難民だった。ブランデンブルク門のそばで通りを渡って、思いのほか早くゲッベルスの家に着いた。邸宅は付近の建物と同じく空襲で損傷を受けていたが、巨大なガレージは無傷のようだった。正面の大きな引き戸は閉まっていたが、隅に小さなくぐり戸があった。ボルマンはそのくぐり戸を慎重に開けた。

中は真っ暗だった。「動くな、両手をあげろ」という声が飛んできた。

ぱっと明かりがついた。空軍大尉の制服の上からフライト・ジャケットを着た若い男が、拳銃を手にして壁ぎわに立っているのをボルマンは見た。がらんとしたガレージの真ん中に、小型偵察機フィーゼラー・シュトルヒが駐機している。

「ノイマン大尉か？」